

へき地・小規模校における 国語科教育指導のプログラム開発に向けて

夏井 邦 男 乳 井 幸 教 古 川 邦 彦
(北海道教育大学函館校) (前長万部町立双葉小学校) (長万部町立静狩小学校)

川 野 靖 幸 丸 山 敏 儀
(北海道教育大学教育学部附属函館小学校) (北海道教育大学教育学部附属函館小学校)

Toward the Development of a Japanese Language Teaching Program in Rural or Small-Scale Schools

Kunio NATSUI, Yukinori CHICHII, Kunihiko FURUKAWA,
Yasuyuki KAWANO and Harunori MARUYAMA

I はじめに

北海道教育大学の僻地教育研究所・へき地教育研究施設が、昭和28年以降、へき地の児童生徒・へき地の地域社会・へき地複式校の教育上の諸課題に取り組み、教育心理学・教育経営学・各科教育学等の観点やそれらの総合的な視点に立脚した数多くの優れた業績を残してきたことは、周知の事実である。

またこのたび、本学と北海道教育委員会との共同研究の一環として、『複式学級における学習指導のあり方～はじめて複式学級を担任する先生へ～』(平成13年9月)が刊行された。まさにはじめて小規模校・複式学級を担当する先生への手引き書としてその有効な活用が期待されるものであり、誠に喜ばしい限りである。

かつて、徳岡慶一氏は『僻地教育研究 第50号』(1996年3月)において、函館校を卒業した後、へき地校に勤務している初任者教員にアンケート調査を行った結果、彼らが函館校のへき地教育に関する指導に厳しい評価を下していることを報告した(北海道教育大学函館校の「へき地教育」に関する指導の課題 その1 へき地学校の初任者教員へのアンケート調査を通じて)。

上記の論文には「資料；大学への要望の自由記述」の項目があり、数多くの要望が記載されている。そのいくつかを紹介すると、

- 赴任した次の日から授業。「ずらし」も「わたり」もわからないままで、不安だらけ。大学でしっかり実態を話してほしい。

- 圧倒的にへき地校への着任が多いので、現場でどのようなことが行われているのかを伝えていったら大学生にとっても心強いのでは。
- 初任者がへき地校に赴任することは今後も多いことだろうし、いざ赴任したときに戸惑わないように様々な情報やへき地教育のあり方等を必修の講義の中に取り入れていった方が良いと思います。
- へき地教育に興味のある学生にどんどん情報を与えて欲しいと思います。直接、現場の様子や先生方からの話を聞いた方が、学生たちは現実的に様々な状況を予想し、将来の教員生活を考えることができると思います。

などがあり、着任するまでの「不安」や着任後の「戸惑い」等が克明に記述されている。

そうした意味からも、こうした手引き書の刊行の意義は大きいのである。しかし、集合学習の具体例として、体育科を取り上げているが、なぜ、体育なのか、ここには明記されていない。また、その他の教科指導については何も触れられてはいない。

小稿では、長万部町における集合学習の長年にわたる実践を紹介し、集合学習での国語科学習指導のプログラム開発の可能性を探ってみたい。この種の手引き書がより充実したものになることを心から願うものである。

Ⅱ 長万部町における集合学習の取組

1 集合学習「こぶし学校」の沿革

昭和40年代後半、長万部町において、「なんとか小規模校の子どもたちの仲間を増やしてやりたい。子どもの集まりをつくって、その中で遊ばせてやりたい。自分たちでつくりあげる合唱や合奏の喜び、ボール運動のゲームの楽しさを味わわせてやりたい」という強い願いから、町内複式5校（双葉・蕨岱・共立・中の沢・茶屋川）の教師が集まり、教育委員会の協力を得て、集合学習が始まった。昭和50年に、研究主題「集合指導の組織化と効果的指導の実践」を設定し、昭和51、52年度の北海道教育委員会の研究指定を受け、研究を推進した。昭和57年には、5校（昭和59年 茶屋川小学校が廃校）ががっちりこぶしを握り、こぶしの花の咲く時期に開校する、という意味をこめ、「こぶし学校」という名称が決まる。昭和61年「子ども一人一人を生かすとともに、指導内容の精選を図った指導計画の創造」という目標を掲げ、研究を推進し、昭和63年、第36回渡島複式研究大会を開催し、研究の成果を発表する。

この沿革に見られる通り、「こぶし学校」として行われてきた実践は、小規模校の子どもたちに、集団で学習する楽しさや喜びを味わわせるために不可欠な学習形態である。「こぶし学校」の詳細は、昭和61年から平成元年までの実践が記録化されている。北海道において、このような取組を必要としている地域は少なくないはずである。

小稿において、その実績及び成果と課題を紹介するとともに、へき地・小規模校における国語科教育指導のプログラム開発の可能性を改めて考える。

2 集合学習を必要とする児童の実態

この地域の昭和60年頃の児童の実態は、当時の資料によれば以下のようなようである。

中の沢・双葉地区は学校を中心に家々が集まり市街化し、蕨岱・共立地区は、酪農従事者が多く、点在した集落である。そのような環境で育った子どもたちは、全体的に次のような傾向が見られる。

【一般的傾向】

- 明るく純朴、穏和である。
- 与えられた仕事はやりとげるが、向上心が不足気味である。
- 社会性、主体性が乏しい。

【学習面（音楽科・体育科の面から）】

音楽…生の音楽に触れる機会に恵まれない。部分的な学習は十分であるが、合唱・合奏など、より美しく、力強い協和した曲のつかみ方がかける。

体育…少人数のため、集団としてのまとまりのある学習が不十分である。各校とも同質に近い仲間が少ないため、チーム編成して実施する運動では変形競技となり、正しいルールが理解されていない。

このような実態の児童たちに、小規模校単独での学習では味わうことのできない喜びや充実感をもたらすために、集合学習の必要性が生じたと考えられる。とりわけ、集団での学習を必要とする体育科と音楽科に焦点をしばり、取組を始めたことは、たいへん価値のあることである。こうした児童の実態をふまえた上で、「こぶし学校」において集合学習を実現するための骨子が、次のように創られていったのである。

3 「こぶし学校」の経営の方針

「こぶし学校」の指導を成立させるには、「経営方針」「経営の重点」「指導の重点」等を共通理解することが不可欠である。「こぶし学校」では、児童の実態を踏まえた上で、以下のように方針・重点を設定し、集合学習を展開してきたのである。

(1) 経営の方針

- 進んで学び、互いに励まし合う中で充実感を味わうことができる学習指導に努める。
- 心のふれあいを深め、一人一人を集団の中で伸ばす生徒指導の充実に努める。
- 研修の日常化による専門性の向上と、児童の変容に努める。
- 地域・父母との連携を密にし、地域とともに歩む教育に努める。

(2) 経営の重点

- 子ども一人一人を生かし、集合指導の効率を高めるための学習指導計画の研究改善を図る。
- 集団の適応性・協調性・積極性を育てる。
- 研修を組織的に行い、研修日を優先して定例化し、協力して児童の変容を求める集合指導の推進に努める。
- 4校 PTA との連絡提携を深め、集合指導への理解啓蒙を図る。

(3) 指導の重点

- 基礎的・基本的な事項を大切に授業を行う。

- ・意欲をもって学習に取り組める授業の確立
- ・学年差，能力差を考慮した授業の展開
- 自校で学習困難な音楽・体育における領域の学習を充実する。
 - ・分習を基盤とした全習の効果的な展開
 - ・集合指導の年間計画の作成と充実

このような方針・重点を設けて経営を構造化し，昭和40年代後半から「こぶし学校」は実施されてきたのである。

さらに，昭和61年度から平成元年度にかけて，集合指導の特性を生かした研究が推進されたのである。その研究の詳細が次のように記録化され，成果を基盤としながら現在に至るまで実践が展開されている。

4 「こぶし学校」の研究計画

経営の構造化を図り，研究を推進するに当たっては，課題を明らかにすることや方向性，具体的な方策が必要となる。「こぶし学校」では，それらを次のように設定し，昭和61年度から4カ年計画で研究を推進してきた。

(1) 検証的課題

- 学習指導要領の目標・内容を生かした年間指導計画の作成と評価・改善
- 自校の教育課程への集合指導（音楽・体育・集会）の位置づけ
- 全習・分習の指導内容，指導方法の確立
- 集合指導における協力教授指導組織の確立と評価・改善
- 集合指導によってもたらされる児童の変容把握の確立
- 評価を取り入れた指導法の確立

(2) 研究主題

地域に根ざし，一人一人が仲間と力を合わせ，生き生きと学び，鍛え，自らを高めることのできる子どもの育成～集合指導の特性を生かした音楽科・体育科の指導を通して～

(3) 研究主題設定の理由

複式学級の学習指導において，いろいろな問題が考えられる。

○ 地域環境から生ずる問題

市街地から離れ，体育・音楽の施設設備や環境に恵まれないばかりでなく，児童は少人数で集団をつくっていることから閉鎖的・消極的な傾向がある。

○ 複式学級からくる学習指導上の問題

同一学年の児童が少なく，集団で行う学習については，その学習ができにくい，または，できないという状況におかれる。例えば，合唱・合奏・チームで行う球技などはそれである。

また，学習集団が2こ学年にまたがって組み合わさっているということから，能力・経験の差が著しいということがある。このことから，学習内容をどうするかという課題がある。

加えて，複式校では教員数が少なく，専門的な教師が欠けることによって指導力に難点があるし，予算面でも非効率的である。

○ 複式校からくる学習計画の問題

4つの学校は，それぞれ規模が違い，進度も異なる。そこで，学習様式（分習・全習）の取り方や，学習形態（直接・間接）など，学習計画を立てるとき，各校との調整が必要である。

社会性の育成とともに，適正集団での学習を通して，学習の深化を図る指導計画づくりを考える。

上記のような実態の中で，多くの問題を抱えている子に同質に近い仲間を与え，広め，自分たちで創り上げる合唱・合奏の喜び，ボール運動などの題材を通して，集団で学習したときの充実感を味わわせ，社会性を養うとともに，集合指導の学習を通して，体育科・音楽科の指導効果を一層高めることをねらい，研究を進めることにした。

(4) 研究計画

- 昭和61年から平成元年までの4年間とする。
- 集合指導の特性を生かした音楽科・体育科の指導の深化に努める。
- 4校で共同研究を行う。研究目標・内容を定め，研究組織に基づいて役割分担し，指導計画の改善・充実に努める。
- 年次計画
 - 昭和61年度…先進校などのモデルの学習，研究主題の設定，研究内容，研究方法などの研究体制の確立を図り，音楽科・体育科の年間指導計画を作成する。
 - 昭和62年度…年間指導計画に基づいて実践・検証し，渡島複式教育研究会事前公開研究会を行う。
 - 昭和63年度…改善指導計画を基に実践・検証し，渡島複式教育研究会を開催する。
 - 平成元年度…年間指導計画（A・B年度）を確立し，全道複式研究会を開催する。

(5) 研究の仮説

- 適正規模の児童集団を形成し、指導することによって、児童の社会性を伸長し、教科の目標を達成することができる。
- 適正規模の児童集団を最適な指導組織によって指導することにより、指導の効率化を図り、学習の効果をあげることができる。

(6) 研究の内容

○ 2こ学年複式音楽科・体育科の年間指導計画作成の基本的なおさえ

町内4校の児童数の推移と学級編成の実績から、当面、4校の学年学級編成については、2こ学年複式の形態が実態に即応するものと考えた。この上に立って、音楽科及び体育科の題材配列の基本を次のようにおさえた。

ア 音楽科の基本的なおさえ

- (ア) 基本的条件をおさえる。
 - a 指導要領に示されている目標・内容を系統的に把握する。
 - b 児童の音楽経験や実態を明らかにする。
- (イ) 同内容異程度扱いを原則とする。
- (ウ) A・B年度の2本案とする。
 - a より広い音楽経験の願いをこめて、2本案とする。
 - b 基礎能力、歌唱、演奏技能を身につけるように配慮する。
 - c 指導にあたっては、編曲、教具の扱いを工夫するなど、児童の能力を十分考慮する。
- (エ) 題材の配列については、音楽的感覚及び聴取・読譜・記譜などの基礎能力や、歌唱・器楽・演奏技能などを系統的にする。
 - a 題材は明確な目的をもち、児童の音楽的能力を伸ばすことを第一とする。
 - b 鑑賞・歌唱については同程度で指導することができるが、器楽・創作については異程度指導が多くなる。
 - c 児童の生活や地域、学校行事等に関係のある教材や季節の歌なども取り上げて、豊かな生活をさせるよう配慮する。
- (オ) 集合指導の意義を理解し、集合指導を取り入れた自校の年間指導計画を作成する。
- (カ) 単位時間は移動の問題から、集合指導(全習)40分、自校での学習(分習)45分とし、年間35週とする。

イ 体育科の基本的なおさえ(これについては、紙面の都合上、省略した)

○ 年間指導計画作成の基本的なおさえ

集合指導の年間指導計画は、あくまでも、仮説並びに「ねらい」を達成させる方向でつくられるべきであり、なおかつ、自校一校のみならず、集合指導を構成する他の複式3校の学校・学級の経営ともからみ合わせ、無理やひずみのおこらぬよう、さらには、現在勤務する職員が全員転勤し入れ替わった後でも継続されるように作成しなければならないと考えた。

ア 「こぶし学校」の学級編成

低(1・2)学年、中(3・4)学年、高(5・6)学年の2こ学年複式学級編成。

イ 集合指導の期間・教科及び時数

- (ア) 集合指導の実施期間については、4月は学校経営上困難であり、11月以降は季節的に実施不可能であるため、5月より開始し、10月で終了する。
- (イ) 音楽科・体育科の集合指導での指導時数は、低学年10時間、中・高学年は12時間。

その他...始業式・終業式～各1回、
集会活動～4回、発表会～1回、オリエンテーション～開始・終了期に各1回、
中学年町内社会見学～1回、
高学年夏期合宿～1回

ウ 集合指導日・時間及び会場

火曜日の5・6教時、双葉小学校・長万部小学校の普通教室・音楽室・体育館及びグラウンド(昭和63年度から)

エ 題材の選定と配列

- (ア) 音楽科～児童に親しまれている曲を選び、高度の技術を求める指導はできるだけ省き、基礎的・基本的事項を大事にし、各学校における分習が適切に行われるような曲の合唱、合奏を主とする。
- (イ) 体育科～自校では学習困難な球技のゲームを中心とする。
- (ウ) 集会活動～自分たちの学校を見つめ直すとともに、「こぶし学校」としての絆をさらに深め合う機会とする。
- (エ) 発表会～児童の学習意欲の向上を図るとともに、学習の成果を発表できる機会とする。
- (オ) オリエンテーション～開始・終了期に各1回、簡単な自己紹介や反省、再来までのお別れを含んだものとする。

オ 指導計画作成の手順

- (ア) 集合指導日、会場の決定
- (イ) 集合指導の題材の決定
- (ウ) 学年の目標及び内容の系統表作成
- (エ) 年間題材一覧表の作成

- (オ) 集合指導学習内容配列表の作成
- (カ) 題材の指導計画表の作成
- カ その他
 - (ア) 自校の教育課程の中にはっきりと位置づけ、指導の一貫性を図る。
 - (イ) 一題材の指導の中で、集合指導（全習）と自校での学習（分習）の位置づけをはっきりさせ、分習で行う時間と全習で行う時間の目標と内容を具体的に明示する。
 - (ウ) 同内容指導とし、学年差、個人差に応じた指導を重視する。
- (7) 分習と全習の明確化
 - ア 分習と全習のおさえ

集合指導で扱う題材においては、1時間1時間の目標と学習内容をできるだけ詳しく指導内容に明記することが大切である。そのことにより、分習で何をどの程度指導して全習に臨むか、全習の学習から次の分習でどこに力を入れて学習するかなど、分習と全習の一貫性をもたせる。

また、全習の前の学年会議で分習での指導状況や児童の様子を確認し、全習の後の学年会議で次の全習での指導内容とそのための分習での学習内容を話し合い、修正する。
 - イ 分習と全習での指導内容
 - (ア) 分習においては
 - 学校単独で実施できる内容
 - 個人的技能の上達や学校単位での考えをまとめる
 - 次の全習に生かせる内容
 - (イ) 全習においては
 - 集合指導だからできる内容
 - 分習で学習したことが生かされる内容
 - 集団で学習することに喜びを見いだせる内容
- (8) 集合指導後の評価の観点
 - 教師の動きについて
 - ア 指導過程（指導内容など）
 - イ 時間配当
 - ウ 目標のおさえ方（観点等）
 - エ 指導組織（T.T.方式等）
 - オ その他
 - 児童の動きについて（全体的な流れ）
 - その他

- (9) 評価
 - 評価の目的
 - ア 集合指導の年間計画等の改善のため
 - イ 協力教授指導組織の改善のため
 - ウ 児童一人一人に集団の中での自己の存在を正しくとらえさせるため
 - エ 児童一人一人に課題をもって学習に取り組ませるため
 - 評価計画
 - ア 評価項目の決定
 - イ 児童の様子から観点チェック（チェッカー）
 - ウ チーフ、サブ、チェッカーでの評価の確認
 - エ 各児童の「がんばりカード」の記入
 - オ 「児童指導資料」の記入
 - カ 評価を次時に生かす
 - 評価の資料
 - ア 「がんばりカード」
 - イ 「児童指導資料」
 - ウ 授業者（チーフ、サブ）の授業後の反省
 - エ チェッカーの記録
 - オ 児童の作文、日記
 - カ 分習での児童の活動状況と全習に対する意欲（意識）
 - キ 全習後、各校で話し合われた内容（反省、今後への期待）

このように「検証的課題」から「児童の評価」までを詳細に計画し、推進してきた。その結果として、この取組の成果や課題が、次のようにまとめられたのである。

Ⅲ 「こぶし学校」の研究成果と課題

1 研究の成果

- 児童にみられる成果
 - ア 集合指導で得た知識や技能を応用して、自校における学習態度も積極的になった。
 - イ 多人数でなければできないものも可能になり、明るく楽しい学習の雰囲気が出来てきた。
 - ウ 極少人数のため、自校だけではできない自己表現や認め合い、励まし合いの場が設定され、意欲的に行動するようになってきた。
 - エ 他校の友達の素晴らしいプレーや発声・演奏に接したり、たくさんの意見や感想を聞くことが良い刺激となり、意欲的に発表しようとする児童が増えてきた。
 - オ 学習の約束の共通理解が図られ、集合指導の時だけでなく自校においてもきびきびとした行動ができ

るようになってきた。

カ 集合指導を進める中で、仲間が増え、社会性・協調性が育ってきた。

キ 集団生活に対する認識が新たになり、他校の友達と仲良くしたり、協力し合ったりする態度が見られるようになってきた。

○ 教師にみられる成果

ア 協力教授組織の確立により、指導案作成～検討～授業～反省のサイクルを繰り返すことを通して、指導の効率化と共同研究体制が充実してきた。

イ チーフ、サブ、チェッカーの役割などを明らかにすることにより、教師間の連携がよくなり、指導効果があがってきた。

ウ 他校の児童の様子を知ることにより、自校の児童の姿を客観的にとらえることができた。

エ 「こぶし学校」の実践に、これまでの各地における研究の成果を取り入れ、生かす研究実践を通し、教師一人一人の力量が高まった。

オ 4校の教師が、相互研修や親睦交流を図ることによって親密感が増し、そのことが指導上にも好影響を与え、集合指導を支える基盤となっている。

2 今後の課題

- 指導内容の精選を図り、各校の教育課程に適切に位置づく指導計画・集合指導に努める。
- 協力教授指導体制や教材観・指導観について共通理解を図るための研修時間の確保に努める。
- 児童が主体的・能動的に学習できる多様な指導方法の工夫に努める。
- 個人と集団とのかかわりから、個性や能力の育成を図る集合指導に努める。
- 評価の改善とそれを生かす方策の検討に努める。
- 研究成果をまとめ、残された課題や発展的課題を整理する。

以上の研究成果と課題の中で、特に着目すべき点は、体育・音楽・集会で進めてきた集合学習において、児童が確実に変容してきているということである。ここから、他教科においても、集合学習を展開することによって、児童一人一人のよさをさらに伸ばすことができるのではないかと考えられる。

「こぶし学校」の成果の中でも、「自己表現や認め合い」「意欲的な発表」「社会性や協調性」が伸長したことなどは、集合学習の中に国語科を取り入れることで、児童をさらに成長させることができる可能性を秘めていると考えられる。国語科の集合学習を実施することで、他校

の児童の言語生活をとらえることができ、自校の児童の言語生活を客観視することもできる。また、教師同士が、教材観や言語観などを交流することによって、教師の力量の向上や教師間の連携の強化にもつながると考えられる。そこで、この集合学習に国語科を取り入れる場合の課題と展望を明らかにし、国語科での集合学習の可能性を探っていきたい。

IV 国語科における集合学習の実現を目指して

1 国語科の集合学習の課題と可能性

前述の通り、体育科・音楽科については長年の実践の積み重ねにより、指導計画が十分に整備されており、計画的に実施されてきている。しかし、国語科で集合学習を行う場合には、新たに指導計画を練り上げる必要があり、そのためには、多大な労力と検討時間を費やさなければならない。他教科での集合学習が消極的にならざるをえなかった理由が、この点にあると考えられる。集合学習のメリットを考えた場合、体育科や音楽科でのそれに対して、必ずしも国語科の集合学習の必要性を感じていなかったというのが実情のようである。

しかしながら、「コミュニケーション能力」や「伝え合う力」が重要視される現行の指導要領を踏まえると、国語科における集合学習が行われることが期待される。いうまでもなく、「話す・聞く、書く、読む」全ての活動は、児童相互のかかわりの中で行われ、その中で豊かな言語感覚が養われ、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力が育まれていくものである。適正規模の学級においても、コミュニケーション能力の育成が必要とされている現状を考えると、小規模校においては、ことさら集合学習の中に国語科の学習を位置づける必要があると考える。

国語の学習を集合学習で実施した場合には、次のような児童の変容が考えられる。

- 話す・聞くことにおいては、様々な他者の意見を聞いたり、自分の考えを話したりする機会を増やすことで、新たな考えをもつことができる。
 - ・集団でのスピーチ
 - ・話し合い活動 など
- 書くことにおいては、日頃一緒に生活している友だちに手紙や作文を書く場合と他校の友だちに書く場合とでは、言葉遣いや伝える内容に工夫をこらす必要が生じ、相手意識や目的意識のある書き方を身につけることができる。
 - ・作文の交流（推敲）
 - ・手紙 など
- 読むことにおいては、音読の仕方であれ、読解であ

れ、多くの友だちと交流することで、互いに考え方や感じ方をひろげたり深めたりすることができる。

- ・読み取った内容についての考えの交流
- ・読書発表会（鑑賞の交流） など

前述のような課題があるにせよ、これらの児童の変容を想定すると、国語科における集合学習にはかなりの有効性があると考えられる。

2 40人学級での学習と集合学習

40人学級における国語の学習では、一人一人の学びの時間を大切にしながら、全体の中で様々な思いや考えを交流することが可能である。全体での学習を通して、自分の考えのよさを実感したり、他者の発想や意見の中に、自分にはない新たな考えに気づいたりする。また、児童の思いや願いを生かしながら、単元の中に、劇や討論など、多人数ならではの様々な学習活動を取り入れ、ダイナミックな展開ができるのである。

一方、小規模校では、教師が個に応じて意図的に支援することにより、一人一人が自分のめあてや見通しを明確にもち、じっくりと学習に取り組むことができる。その結果、主体的に学習に取り組み、自分の学びの価値に気づくことができるのである。少人数であるため、教師の目が一人一人の児童の学習に行き渡り、より適切な支援を行うことが可能なのである。

このように、40人学級と小規模校の学習には、それぞれのよさがある。この両方のよさを生かすことができるのが、集合学習であると考えられる。集合学習の場合、それぞれの学校での分習の中で、一人一人がしっかりと学習することができる。さらに、数校が集まって行う全習で、40人学級で行われていることに近い学習形態を取り入れることも可能なのである。

実際に国語科の集合学習を行う場合には、分習と全習の役割を明確にする必要がある。「こぶし学校」で行われてきた体育科や音楽科の長年にわたる実践の成果を踏まえると、国語科での分習と全習の役割は、おおよそ次のように考えられる。

分習では、これまでのように一人一人にめあてを明確にもたせながら、より適切でタイムリーな支援を行い、一人一人の学びのよさを味わわせる。次に、分習で学んだ成果を生かして、全習を行う時には、互いに意見をもちよることで、分習では経験できないような、幅広くて実りのある意見交流が可能になる。

さらに、全習を通して、児童が共通のめあてをもち、全体で学習計画を立てることにより、40人学級で行っているような、劇や討論会、スピーチなど多様な学習活動へ展開していくことも可能なのではないか。このような

学習形態をとることで、同年齢集団の中で、互いの意見や考えを交流しながら、意欲や向上心をもって学習を進めることができると考える。

個人学習の定着と全体交流を併せて行うことのできる集合学習は、へき地・小規模校の国語科教育の中で有効な手だてになるのではないだろうか。

3 集合学習の実現に向けて

これまで述べてきたように、集合学習における国語科の有効性は大きいと考える。しかしながら、「こぶし学校」では、これまで体育科や音楽科でのプログラム開発はなされてきたものの、他教科、国語科の集合学習は行われてこなかった。この要因を考えると、以下のような点が挙げられる。

- 集合学習の創設の目的が、小規模校単独では不可能な体育でのチームスポーツや音楽での合唱・合奏の実現にあったため、国語科の集合学習という発想そのものがなかった。
- 新たなプログラム開発には、多大な労力と時間が必要となる。 など

国語科の集合学習を実現させるためには、まず、集合学習の国語科教育指導のプログラムを開発しなければならない。これまで行われてきた体育科や音楽科での計画・実践の進め方、その成果と課題を国語科の学習に生かしながら、研究レベルでその基本的な形を創り上げる必要がある。そのためには、40人学級で行われている個別学習と集団学習を単元や題材レベルで洗い出し、集合学習に対応できる学習を年間指導計画の中に位置づける。その上で、分習と全習において、目的を明確化し、何をどのように学ばせるかを検討し、綿密な指導プログラムを作成することが重要である。さらに、小規模校それぞれの年間指導計画にそのプログラムを位置づけ、実践しながら修正をかけ、より実施しやすいものに改良していかなければならない。

へき地・小規模校の特性を生かし、子どもたちに「生きる力」を育む一端を担っている国語科教育の充実のためにも、様々な課題を克服し、研究・実践を積み重ねていく必要があると考える。

IV おわりに

これまで述べてきたように、へき地・小規模校の実態から、小規模校では、集合学習の新たなプログラム開発をするための多大な労力や時間を確保することは不可能に近いと考える。そこで、今後は、大学と附属との連携はもとより、公立学校の協力を得て、どのような単元・題材を通して、児童にどのような力を身に付けさせるこ

とができるかを明確にし、具体的な指導プログラムを作成していきたいと考えている。

子どもたちの成長を心から願い、「こぶし学校」を立ち上げ、様々な困難を乗り越え、研究・実践を積み重ねてこられた教職員の方々に心より敬意を表したい。

今回の研究に際して、「こぶし学校」の研究・実践資料を提供して下さった長万部町立双葉小学校・旧蕨岱小学校・旧茶屋川小学校・共立小学校・中の沢小学校の関係者各位に、衷心より感謝申し上げます。

参考文献

- ・僻地教育研究（第16巻 第1号 1969年3月）
- ・北海道教育大学教育学部附属函館小学校研究紀要（平成12年～14年度版）